

主 題：キリスト者の教会に対する心遣い①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章1-2節

テーマ：教会に対するキリスト者のふさわしい心遣いとはどのようなものなのか？

今朝見ていきたいのは、コロサイ2：1-5のみことばです。きょうと来週、キリスト者の教会に対する心づかいに関して、パウロの残したことばからいっしょに考えてみたいと思います。

コロサイ2：1-5

「1 あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。：2 それは、この人たちが心に励ましを受け、愛によって結び合わされ、理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。：3 このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。：4 私がこう言うのは、だれもまことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導くことのないためです。：5 私は、肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたといっしょにいて、あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいきます。」

前回まで、コロサイ1：24-29を通して、パウロ自身の働きについて学んできました。キリストの福音に仕える者と召された彼が、いったいどんな態度でそれを行っていたのか、いったいどのようにして主に仕えていたのか、その模範となる姿を考えたのです。特に最後28-29節では、パウロの働きの理念、確信とも言える部分に触れることもできました。もう一度28-29節を見てみると、「：28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。：29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」と記されていました。こうしてパウロは、どんな時であろうとあらゆる人々をキリストにある成人として立たせようとしていました。その目標に心を留めて、中心となるキリストを宣べ伝え続けていたのです。すべての人がキリストに似た者へと変えられていく、そのゴールをひたすらに目指して、いつも一生懸命に働いていました。でも、そんな彼の大変な働き、「労苦」というものは、彼自身の力によってなされたものでもなかったのです。彼のすばらしい働きは、ただ彼のうちに力強く働くキリストの力に拠り頼んだものでした。そんな仕える者としての彼の姿こそ、私たちも見習うべき態度でした。

○教会に対するパウロの心遣い：四つの特徴

さて、こうして1章は終わり、2章へと話は進んでいきます。パウロはまだこの1-5節においても、同じように自分自身の働きについて語っていました。でも、パウロは一般的な内容から、より個人的な内容へと焦点を移していきます。あらゆる人々に対してではなくて、コロサイの兄弟姉妹のためにどれほど自分が熱心に働き、葛藤していたのかということをも1節から鮮明に描いていました。そしてそんな姿のうちに、教会のために抱いていたパウロの心づかいというものを見て取ることができます。霊的リーダーとして教会のためにすべてを捧げていた人物の心づかいです。彼は間違いなく、同じ神の家族である兄弟姉妹に対して、あふれんばかりの愛の心を持っていた人物でした。今回はそんな彼の教会に対する心づかいがいったいどのようなものだったのかを少し考えてみたいと思います。いったいパウロはどのような愛を、どのような関心を人々に払っていたのか、示そうとしていたのか——。特にこの箇所から四つの特徴を見て取ることができます。そして、これまでもそうだったように、この心づかいの四つの特徴も、今の私たちひとりひとりが見習うことのできる大切な模範になります。ですから、ぜひ自分自身の歩みと照らし合わせながら、いっしょによく考えてみましょう。

1. 苦闘を伴う心づかい 1節

パウロの心づかいの一つ目は、苦闘を伴う心づかいです。兄弟姉妹のことを愛していたパウロは、彼らのために大きな苦闘を覚えてもがいていました。1節で彼はこう言います。「あなたがたとラオデキヤ

の人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。」とはっきりと記されていました。パウロは自分がどれほど苦闘しているのかを人々に知ってほしいと願っていました。

ここで「苦闘」と訳されていたことばと同じものが、1：29の最後「奮闘しています」ということばで使われていました。ちなみにこの「奮闘しています」ということばには「苦悩」とか「激しい苦痛」といった意味のほかに、「闘う」とか「争う」という意味が含まれていました。時にはレースなどを競う競技者とか、また闘技者を表すこともありました。Iコリント9：25では、同じことばが「また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」と使われていました。ですから、まるでオリンピックの選手が勝利にのみ目を向けて、みずからを鍛え上げて、文字どおりすべてをささげているかのように、パウロはあらゆる犠牲を払って人々のために懸命に闘い続けていました。いつも教会に関心を払って、その必要を喜んで満たそうとしていた彼は、それに伴う多くの痛みや悩みをいとわなかったのです。そんな彼の姿は、もちろん聖書のいろいろな箇所を通して見取することができます。例えば、テサロニケの教会に対しても、彼はこのように口にしていました。Iテサロニケ2：7-9に「：7 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。：8 このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。：9 兄弟たち。あなたがたは、私たちの労苦と苦闘を覚えているでしょう。私たちはあなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。」と書かれています。これを読んだだけで容易に読み取れます。パウロは兄弟姉妹のことを心から愛していました。彼はまるで母親が子どもを養い育てるかのように、彼らの間でやさしくふるまっていたのです。母親が子どもの周りに危険が迫っていないかいつも気を配り、食事や睡眠といった必要をいつも気にかけてくれたり、自分のことよりも我が子の安全や我が子の最善を何よりも願っているかのように、パウロは彼らのことを思っていたのです。その愛にあふれる思いは、たとえ自分のいのちでさえも喜んで彼らに与えたいと思うほどでした。間違いなくパウロの関心は、自分自身のことではなくて、愛する神様の教会のひとりひとりにあったのです。

また、そんな彼の思いや愛は、テサロニケの兄弟のところだけにどまるものではもちろんありませんでした。彼の心づかいはすべての教会に対するものでもあったのです。IIコリント11：28-29にこんなふうに記されています。「：28 このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかひがあります。：29 だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか。」と。少し考えてみてください。パウロは自分自身がいろいろな迫害や苦痛を味わっていました。今読んだ箇所の直前のところにも、彼はこれまでに自分が受けてきたさまざまな苦難、むち打ちや石打ち、難船や飢え渴きといったものに触れていました。置かれている状況を考えてみれば、だれがどう見ても、簡単なものではありませんでした。そんな外から来る問題を味わっている中でなお、彼は教会に対する思いを日々持ち続けていました。自分自身のことにも心奪われてもおかしくないような厳しい状況の中、彼は変わらずにほかの兄弟姉妹のことに心を配って、彼らのことで思い悩み続けていたのです。

パウロにとって、人々が霊的に成長しているのかどうか、彼らがますますキリストに似た者となっているのかどうかすべてでした。そしてそれに少しでもつながるのであれば、自分がそのために苦闘することをいとわない。それが、彼が示していた心づかいだったのです。確かに彼の関心は、自分自身のことではなく神の家族ひとりひとりにありました。パウロはコロサイの兄弟姉妹に対しても、もちろん同じように接していました。今この手紙を書いたとき、パウロは投獄されていたのです。そんな状態に

あったとしても、パウロは彼らが霊的に成熟したものへと変えられていくことを絶えず祈り求めて、彼らのために受ける苦しみをおのれの喜びとしていたのです。

これだけ聞いただけでも、彼が持っていた心づかいが素晴らしいことがよくわかりますけれども、もう一つだけ注目してほしいことがあります。もう一度1節をよく見ると、「あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも」とありました。つまりパウロは、コロサイの人たちと、コロサイの町から北西に約20キロ行ったところにあるラオデキヤの町、その周辺の人たちにも仕えていました。彼らのために苦闘していたのです。でもその相手はみんな彼と面識のある者たちではなかったということです。パウロはいっさい顔を見たことのないような、直接会ったこともないような人たちのためです。多くの苦しみを受けること、葛藤を覚えることをいとわなかったのです。私たちだったらどうでしょう？私たちは、自分自身が愛を示したら、愛を示し返してくれるような、よく知っている関係が深い兄弟姉妹のためであれば、喜んで自分自身をささげようとするかもしれません。でも顔も知らない、一度も会ったこともないような兄弟姉妹に対して、果たしてみずから進んで犠牲を払おうとするのでしょうか？余り関係のないようなほかの兄弟姉妹の必要や成長を心から祈って、そのために日々心を悩ませ続けたりするのでしょうか？パウロの愛というのは、確かに分け隔てのない愛でした。彼は教会全体を心から愛していました。どれだけ自分が相手のことを知っているかどうか、それが彼の愛を示す基準ではなかったということです。

では、なぜそんな愛を示せたかということ、パウロは自分が神様から受けた愛をよくわかっていました。何よりも心から自分の主である救い主イエス・キリストを愛していました。だからこそ、彼はキリストが愛したその教会を同じように愛そうとしました。愛するキリストが教会のためにご自身をささげられたのと同じように、彼もまた教会のために自分自身をささげようとしていました。パウロは神様の愛というものを本当に知っていたからこそ、その愛を受けた者として、喜んで人々に愛を示そうとしていたのです。まさに彼はあのヨハネも口にしていた真理を自分のこととして知っていた人物でした。ヨハネはⅠヨハネ4：19－21で「:19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」と述べていました。パウロはそのように歩んでいました。

では、私たちはどうでしょう？パウロのように、キリストが教会を愛していたように、私たちはみずから教会のことを愛しているのでしょうか？キリストが教会のために犠牲を払われたように、喜んで教会のために犠牲を払おうとしているのでしょうか？自分自身の必要を満たすことに心が向いているのでしょうか？それとも兄弟姉妹の必要を満たすことにいつも心が向いているのでしょうか？それぞれがよく考えてみてください。私たちの関心は自分自身にあるのでしょうか？それとも愛する神の家族ひとりひとりにあるのでしょうか？パウロの愛は分け隔てのないものでした。みずからが進んで示すものでもあり、人々の必要を満たすものでもあり、また何より犠牲的なものでした。彼は人々の霊的成長に関心を払っていて、危険が迫っているのであれば警告を与えてあげ、成長に必要なみことばをいつも語ってあげ、そして彼らがますますキリストに似た者となっていくことを祈り続けていました。そしてそのためであれば、自分自身が多くの苦しみを味わうことも、痛みを味わうことも、悲しみを味わうこともいとわなかったのです。神様から受けた愛を忘れていなかった彼は、苦闘を伴う心づかいを教会に対して示していました。そしてこれこそ、今の私たちにとっても模範とすることができる一つ目の特徴でした。

2. 目的を伴う心づかい 1節

パウロの心づかいの特徴の二つ目は、目的を伴う心づかいです。今見てきたように、兄弟姉妹のことを愛していたパウロは、彼らのために必死に苦闘していました。喜んで犠牲を払って、彼らの成長を思っ

気にかけている人々の歩みのうちに、あるものが見られるようになることを強く願って、兄弟姉妹のために熱心に働き続けていました。

●パウロの苦闘：三つの目的

では、いったいどんなものが見られるようになることを願っていたのが2-3節のところに三つ挙げられていました。

2-3節「:2 それは、この人たちが心に励ましを受け、愛によって結び合わされ、理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。:3 このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」と書いています。順に見ていきましょう。

1) 心に励ましを受けるため 2 a 節

まず一つ目の目的は、心に励ましを受けるためでした。パウロは愛する信仰者ひとりひとりの心が励まされることを願って、必死になって苦闘していました。ここで二つのことばに注目して見てください。

▷「励ましを受け」

一つ目は、「励ましを受け」ということばです。「励まし」ということばは、私たちの先月のみことば、ヘブル3：13で使われていたものでした。このことばには、だれかのそばにやって来て、慰めることや諭すこと、戒めることや力づけることという意味がもともと含まれていました。このことばはいろいろな意味を持っていて、この文脈においては、パウロは特に信仰者たちが力づけられることを強調していました。信仰者たちの弱まった心が強められて、元気づけられることを願っていたのです。このことばに関してウィリアム・バークレー師も次のような説明をしていました。「あるギリシャの連隊が心を折られ、すっかり意気消沈していた。将軍が指導者を送り込んで話をさせたところ、勇気が生まれ、うなだれていた男たちが再び勇ましい行動に出ることができるようになった。ここでの「励ます」は、まさにそのことを意味しています。教会がどんな状況にあつたとしても対処できる勇気で満たされるようにと、パウロは祈っていたのです。」と。パウロの願いは、愛する兄弟姉妹たちが励まされ、彼らが強められることでした。

▷「心に」（三つの要素）

同時に、この箇所でもう一つ注目してほしいことばは「心」ということばです。パウロが苦闘していたのは、落ち込む彼らがただ単に感情的に励まされるためではありませんでした。そんな彼らが心に励ましを受けること、それがパウロの願いだったのです。聖書が教えている「心」とは、いったいどのようなものだったのでしょうか？簡潔に言えば、「心」というのは人の内側の姿やその人自身を表すものでした。でも、もう少し聖書をよく見ていくと、そんな「心」というのが少なくとも三つの要素から成り立っていることを見て取ることができます。

①思考の要素

いったいどんなものかと言うと、一つ目は思考の要素でした。心は、私たちが何かを考えたり、理解する場所でした。ヘブル4：12に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」とありました。

②動機の要素

二つ目は意思や願い、動機の要素でした。私たちが何かを決めたり、何かを願ったりする場所でもあったのです。Ⅱコリント9：7に「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」と書いてありました。パウロはここでコリントの信仰者たちが正しい動機をもって、それぞれの心で決めたとおりにささげ物をすることを望んでいました。私たちの心は考えるだけではなくて、決めるといふ部分も担っていたのです。

③感情の要素

そして三つ目は感情の要素です。心は、私たちが抱く感情を覚える場所でもあります。詩篇 33 : 21 を見ると、「まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。」と書いていました。このようにして、私たちの心は喜んだり、感謝したり、悲しんだり、怒ったりと、さまざまな感情を覚える部分にもなるのです。

これが、みことばが教えている心というものでした。心というのは感情だけではなくて、私たちの考えや意思、動機といったものをも覚える場所でした。そしてそんな場所であるからこそ、そんな心から私たちのことばや行動のすべては生まれてくるのです。だからみことばは私たちに対して、いつもその心を注意深く見守っていなさいと何度も教えていました。箴言 4 : 20-21、また 23 節にこうあります。「:20 わが子よ。私のことばをよく聞け。私の言うことに耳を傾けよ。:21 それをあなたの目から離さず、あなたの心のうちに保て。……:23 力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」と。またイエス様もマタイ 12 : 34-35 で「:34 ……心に満ちていることを口が話すのです。:35 良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」と書いていました。すべての源である人の心のうちに、何が満ちているのかということは非常に大切なことでした。正しい真理で心が満たされているのであれば、その心からは自然と正しい応答が生まれてきて、反対にその心をいっさい守らずに、そこに真理がなかったとすれば、その応答がどうなるのかということはもう言うまでもありません。

そしてパウロはここで兄弟姉妹たちのために苦闘していたのもこのためでした。彼は彼らの心を励まそうとしていたのです。感情的な部分だけではありません。彼らの考えや思いの部分に至るまでも真理によって力づけようとしていました。そしてそれをコロサイの兄弟姉妹たちは必要としていたのです。背景を思い返してみてください。コロサイの教会には以前からも何度も触れているように、にせ教師が入り込み始めていました。彼らはさまざまな間違った教えを教会内で広げていただけではなくて、何よりもイエス・キリストに関することで、人々に混乱をもたらしていました。確かにイエス・キリストは偉大なお方かもしれませんが、でも、すべてに勝る最高の存在では全然ありませんと、彼らは言っていたのです。まことの神様でもなければ、まことの人でもない、そんな存在にだれかを救うことなどできるわけがないと。キリストだけでは到底すべてにおいて不十分なのだと。こうしてにせ教師たちは正しい福音をねじ曲げようとしていました。まるで救いにおいても、信仰生活においても、キリストだけでは足りないかのような、十分でない存在かのように扱っていたのです。当然、信仰者の間には戸惑いが生じていたでしょう。彼らが信じている土台である真理が揺るがされてしまえば、その心に不安や恐れを覚えたでしょう。真理が揺らいでしまえば、弱っていたとしてもおかしくなかったでしょう。だからこそパウロは愛をもって彼らに真理を改めて示していました。私たち 1 : 1 からずっと見てきたのですけれども、まさにパウロはこの手紙を通して、彼らに対していったい神様がだれなのかということ、そしてこの神様にある喜びや希望、すばらしい約束を何度も何度も思い出させようとしていたのです。何よりもイエス・キリストがすべてを造られたお方であること、イエス・キリストがすべてを支配されているお方であること、イエス・キリストがすべてにおいて第一のお方であること、この偉大なお方こそすべての者にとって十分な存在であるということ、それを何度も繰り返し彼らに考えさせていたのです。偽りによって混乱していた、弱っていた人たちの心にとって、これはどれだけ大きな励ましだったでしょう。彼らはどれだけそれを必要としたでしょう。

同時にこれは、今の私たちにとっても必要だと思います。自分の歩みを振り返ってみてください。果たして私たちは日々の生活の中であって、どれだけ自分自身にみことばの真理を思い出させ続けようとしているのでしょうか？また、その逆にどれだけ私たちはそれ以外のものに気をとられて心を騒がせ、不安や恐れを抱いたり、不満や失意に陥っていたりするのでしょうか？恐らくここにいる私たちみなそれぞれに難しさを覚えているでしょう。だとすれば、そんな弱さを覚えている私たちひとりひとりにとって、

真理を思い出させ続けてくれる、そうやって励まそうとし続けてくれる兄弟姉妹はどれほど必要な存在でしょう。また、キリストの姿や神様にあるすばらしい約束、私たち自身が思い起こしたいと思うようなものをだれかに語り続けるという責任、役割は私たちにとってどれだけ必要なことでしょうか？それはいったいどんなに大切な働きでしょうか？パウロはコロサイの兄弟姉妹たちの必要を覚えていました。彼らの心が弱っていることを知っていました。だから、彼らの心が励まされるようにと愛をもって真理を語ってあげて、そのために苦闘していたのです。それが、パウロが必死になって苦闘していた一つの目的だったのです。

2) 愛によって結び合わされるため 2b節

また続けて二つ目の目的は、「結び合わされ」るためでした。パウロは、信仰者ひとりひとりの心が励まされるだけではなくて、彼らの心が愛によって結び合わされていくことを思って苦闘していたのです。ここで用いられていた「結び合わされ」ということばには、もともと二つのものが一つとされるとか、互いに編み込まれる、親密なものとしてつなぎ合わされるといった意味が含まれています。二つのものが一つにされるのです。二つのバラバラなものが互いに編み込まれるのです。要するにパウロは、愛する兄弟姉妹たちがますます固く結びついて離れなくなることを、より親密なものとして一致することを強く願っていたのです。

もちろん教会にとって、この一致というものがいかに重要なものであるのかは、パウロはよくわかっていました。だから彼は何度も繰り返し教えていたのです。例えば、ピリピの教会に対しても彼はこう述べていました。ピリピ2：1-2に「:1 こういうわけですから、もしキリストにあつて励ましがあつて、愛の慰めがあつて、御霊の交わりがあつて、愛情とあわれみがあるなら、:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」とあります。また思い返せば、あれだけさまざまな問題を抱えていたコリントの教会に対して、彼は最初にどの問題に対して指摘を与えていたのか覚えていますか？それは教会の中に起こっていた分裂、不一致の問題でした。いつものようにあいさつを口にした後で、彼はIコリント1：10で「さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」と語っていたのです。コリントの兄弟たちは間違いなく深刻な問題を数多く抱えていました。彼らの間には不品行の問題や偶像礼拝の問題、霊的賜物や主イエスの復活に関する問題さえあったのです。しかし、そんな数多くの深刻な問題の中にあつても、パウロはまず教会が一致することを真っ先に求めていました。それほどまでに、この一致が重要なものであることをわかっていたのです。

また、一致を願っていたのは何もパウロだけではありませんでした。私たちの愛する主も当然望んでいたのです。十字架にかかる前に、弟子たちと最後の晩餐をした後、主は彼らのためにこのように祈っていました。ヨハネ17：20-21で「:20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」と言っています。確かにこの時、イエス様は自分の弟子たちのために祈っていました。でもそれと同時に、「彼らのことばによってわたしを信じる人々」ということばがありました。これは言いかえれば、弟子たちが語り告げていく福音を同じように信じて救われるすべての人々、主のために今を生きている私たちのためにも主はここで祈ってくださったというわけです。では、どんなことを祈ってくださったのかと言うと、それは私たちが「みな一つとなる」こと、主にあつて一致することだったのです。ですから一致というものは、私たちにとってとても大切なものでした。

もちろん実際に、一致を目指していくことは容易なことではありません。私たちはいろいろな人と歩みをともし、それぞれのうちにさまざまな違いがあるからこそ、すれ違いや争い、不一致が生まれてくることがあります。例えば性別が違えば、それだけで大きな難しさを覚えることがあります。結婚されている皆さんはよくわかると思いますけれども、男女間にあつて物事の考え方が違っていたり、コミュニケーションの方法が違っていたりするからこそ、意味を取り違えることで誤解から争いが生まれてしまうこともあります。また、私たち自身が罪の性質を持って生きているからこそ、プライドによって自分の思いを優先し、頑なになつて自分と合わない人と関わらないようにすることもあるかもしれません。それに加えて、敵であるサタンも教会が一致しないようにと日々働いています。私たちは、このようなさまざまな闘いや困難がある中で、一致を保つことが求められていました。間違いなくそれぞれにとって、大きなチャレンジになります。

果たしていろいろな難しさがある中で、ひとりひとりがしっかりと結び合わされていくために何が必要になるのでしょうか？みことばはその答えを教えてくださいました。パウロはそのことを言っていたのです。彼は2節で、単に「結び合わされ」と言っておりませんでした。「愛によって結び合わされ」と言っていたのです。その答えは「愛」でした。パウロは同じコロサイの中でも、3：13-14で「：13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあつても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。：14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」と述べています。「愛」が必要でした。もちろんこの愛というのは、世の中が考えるような単なる感情にだけ基づくものではなくありません。ここで「愛」と訳されていることばにはどちらも“アガペー”が用いられていたのです。言いかえれば、これは単に感情で終わるのではなく、意思を持ってみずから進んで、だれかの益のために自分自身をささげる、そんな犠牲的な愛を表していました。だれかのことを心から愛しているからこそ、その愛は感情でとどまるのではなく、犠牲的な行動をもって喜んで仕えようとするのです。マッカーサー先生もこの愛することについて、このように述べていました。「誰かを愛するというのは、その人に対して優しい気持ちを持つことではなく、その人の必要を満たすことであると定義づけられます。あなたが誰かのために最後に犠牲を払った時が、あなたが最後にその人を愛した時なのです。」と。そんな犠牲的な愛が求められていました。

このような犠牲的な愛というものがどれほど教会の一致にとって欠かすことのできないものなのでしょう？自分自身のことではなくて、相手の最善を何よりも願う、そういった愛というのはどれだけ重要なものなのでしょう？想像してみてください。教会というのは罪を赦されて、新しく造り変えられた者たちの集まりです。そこには性別や年齢や国籍や文化、育ってきた環境や社会的な立場も異なる人たちが数多くいます。考え方も価値観もそれぞれに違いますし、ひとりひとりがまだ罪の性質をもっているのです。みな違いを持っているのです。そんな教会に、もし愛がなければどうなってしまうのでしょうか？私たちが勝手に考える愛ではありません。今、私たちが見たその愛です。もし人々がいつも自分のことだけに心が囚われて、ほかの人に仕えることを拒むのであれば、どうなってしまうのでしょうか？間違いなくそんな教会は絶え間なく争いが起こり、分裂してバラバラになってしまうでしょう。だからこそ教会が一致を保つていく上で、愛は私たちにとってなくてはならないものでした。それを私たちが知っているのであれば、果たして私たちは実際にそのように歩んでいるのでしょうか？みずから進んで犠牲を払って、お互いに愛し合うことを実践しているのでしょうか？私たちのふるまひは、自分自身のことではなくて、相手の益となることを何よりも求めたものなのでしょうか？行動だけではありません。私たちのことばも同じです。私たちが発言しているそのことばは、聞く相手がキリストに似た者へと変わる成長につながるものなのでしょうか？それとも自分が中心のつまずきを与えてしまうものなのでしょうか？確かに愛を実践することに、私たちは難しさを覚えます。でも、もし私たちがだれかに対して悲しみや不満、心のうちで怒りや憤りを覚えてしまうのであれば、その時は私たち、いつも私たち主の十字架を見上げるこ

とです。もうすでにキリストがどんな愛を示してくださったのかを、自分自身に語り続けることです。この方がどのようなのしりを受けて、本来受ける必要もないその恥を人々から受けながら、十字架を背負い、ゴルゴダの丘へと向かって行かれたのか。この方がどれほどの苦しみを背負って、どれほどの辛さをあの十字架で味わったのか。私たちの代わりにどれだけの神の御怒りを耐え忍んでくださり、どれだけ大きな犠牲を払ってくださったのか。本来であれば滅ぼされるべき私やあなたのような罪人のために、この方がどれほど愛を示してくださったのか、その真理にまず自分が心を留めることです。

私たちの愛する主は、実際にご自身のいのちをささげてくださいました。この方はことばだけ、感情だけではなかったのです。この方はご自身のいのちをささげてくださいました。そんな偉大な愛を覚えて、互いに愛し合っていこうと、そう実践していくことです。Iヨハネ3：16に「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と書いていました。愛は犠牲的なものでした。キリストの愛は、だれかのために自分自身を捨ててささげることだったのです。私たちに当てはめて考えるのであれば、愛は自分自身にとって都合のいいときだけ犠牲を払う。自分に時間や体力や金銭的な余裕があるときだけ身をささげますとは言わないということです。それでは犠牲になっていないからです。私たちの主はもうすでにすばらしい愛を示してくださいました。そのキリストの愛を受けたのであれば、果たしてどんな愛を私たちは今、神様のために、またほかの人のために実践しようとしているのでしょうか？パウロは、コロサイの兄弟姉妹の必要を覚えていました。彼らが愛によって強く結びついていくこと、一致するということが大切なのをわかっていました。だから彼は彼らが愛によってますます結びつくことを願って、そのために苦闘していたのです。それが、パウロが持っていた願いでした。必死になって苦闘していた二つ目の目的だったのです。

続けて三つ目といきたかったのですが、残念ながら時間が足りないので、三つ目から来週いっしょに見ていきたいと思いますが、終わる前に少し考えてみてください。ここまで私たちはパウロの教会に対する心づかいというものを一部見てきました。改めてすごいと思いませんか？彼は確かに同じ神の家族である兄弟姉妹に対してあふれんばかりの愛の心を持っていた人物でした。彼らの心を励ましてあげたり、一致のためであれば喜んで自分自身が犠牲を払って歩んでいたのです。しかもそんな信仰者たちのほとんどは、彼が直接会ったこともないような人たちでした。私はこのパウロの模範を1週間覚え続けました。この霊的リーダーが持っていた愛や、必要を満たすための犠牲を自分自身の歩みに照らし合わせて考えていました。でもそれを考えれば考えるほど、自分が全然この模範から外れていることに気づかされました。皆さんに対して私が持っている愛というものが、皆さんの必要のために私が払おうとしている犠牲が、パウロが持っているものよりも、まだまだかけ離れているということに、自分は大きなチャレンジを受けました。でも同時に、こうやって自分がみことばを見たときに、パウロはこうやってキリストのために歩んでいたこと、こうやって教会のために心づかいを持って歩んでいたこと、その模範を見ることができたことに励ましも受けました。私たちはむやみやたらに歩んでいるではありません。聖書が私たちに必要なことを教えてくれています。そこに私たちはいつも喜びや希望を見出すことができます。だから、その真理に自分も励まされました。皆さんひとりひとりにとっても、同じであることを願っています。確かに私たちはまだまだ多くの点において弱さを覚えます。頑なな部分もあります。でも、こうして私たちがみことばを見ると、はっきりと私たちの目指していくべき姿を見て取ることができます。だとすれば、神様の助けを祈り求めながら、パウロが示していたその心づかいにならう者として、ともに成長していきましょう。